

III 紹 介 III

German Industry and Global Enterprise. BASF: The History of a Company, by Werner Abelshauser, Wolfgang von Hippel, Jeffrey Allan Johnson and Raymond G. Stokes, Cambridge University Press, 2004.

古 川 澄 明

1. はじめに

ここに紹介する W.アーベルスハウザー, W.v.ヒッペル, J.A.ジョンソン, R.G.ストックス共著『ドイツ産業とグローバル企業 BASF社企業史』(*German Industry and Global Enterprise. BASF: The History of a Company*, by Werner Abelshauser, Wolfgang von Hippel, Jeffrey Allan Johnson, Raymond G. Stokes, Cambridge University Press, Cambridge, 2004) は、書名に見られる通り、BASF 社(BASF Aktiengesellschaft Carl-Bosch-Straße 38, 67056 Ludwigshafen, Germany)の創業(1865年)から、「IG ファルベン社」(Interessengemeinschaft Farbenindustrie Aktiengesellschaft [「利益共同体染料工業株式会社」], 略称「イー・ゲー・ファルベン工業」, IG Farbenindustrie AG, 以下「IGファルベン」と略称)への企業合同(1925年)と、ナチス政権(1934~45年)の経済政策への深い関与を経て、戦後IGファルベン社の解体に伴うBASF社再建とその後の発展に至るまでの企業史を取り上げた、677頁という大部の力作である。本書は、ドイツ語原版 *Die BASF. Von 1865 bis zur Gegenwart. Geschichte eines Unternehmens*, by Werner Abelshauser, Wolfgang von Hippel, Jeffrey Alan Johnson, C.H.Beck, 2002 の英語版である。4人の執筆者の一人で編者でもあるアーベルスハウザー教授(Prof. Dr. Werner Abelshauser, Chair in Economic History at the Faculty of History and Director of the Institute of Global Society Studies at Bielefeld University, Germany)から本書が筆者の手元に届いたのは、2004年晩秋のことであった。1年が経過している。本紹介文を公表するには遅きに失する観が無きにしも非ずではあるが、しかもわが国におけるドイツ化学工業史・企業史の研究分野では加来祥男や工藤章などの手に成る優れた研究業績があり、筆者の容喙は憚るところでもあるが、まだ書評が公表されていないようにも思われるので、敢えて紹介文を書くこととした。なお他の3人の執筆

者は, Wolfgang von Hippel (Universität Mannheim, Germany), Jeffrey Allan Johnson (Villanova University, Pennsylvania, USA), そして Raymond G. Stokes (University of Glasgow, UK) である。

BASF社は, 衆知の通り, 戦前から日本との関係も深く, 三重県四日市や茨城県鹿島他に生産拠点をもつ, 今日世界化学業界のグローバル・リーディングカンパニーの一つである。5つの事業セグメント (化学品, プラスティック, 高機能製品, 農業・栄養関連製品及び石油・ガス¹⁾) において年間375億ユーロの売上高(2004年)を上げている。5つの事業セグメントの製品を概観しただけでも, 約8,000種に及ぶといわれ, 多様な化学工業製品を生産・供給する巨大企業グループであることが分かる。世界5大陸において約8万2,000人, ドイツ国内だけでも約4万7,000人の従業員数(2004年度)を擁する(次頁の表:「Employees by region in 2004」を参照のこと)²⁾。

BASFとは, ドイツ語表記ではBadische Anilin- & Soda-Fabrik, 英語表記ではBaden Aniline and Soda Manufacturingであり, 日本語に訳すと, 「バーデン・アニリン・ソーダ製造所」とでも訳せるであろうか。BASFとは4つの頭文字に由来するといわれ, 登録商標(trademark)となっている。Badenとはドイツの地域名であり, 「西ドイツの南西部にあり, かつては大公国であったが, 現在はBaden-Württemberg州の一部³⁾」

1) ①化学品=有機中間物 (アミノカルボン酸, アミン類, アルコール類, カーボネート, アルデヒド及びアセタール, エステル類, カルボン酸エステル, 有機酸とその誘導体, ケトン及びキノン, 尿素, 酸クロライド, クロロフォーメート, カルバモイル クロライド, ニトリル, 複素環式化合物のイミダゾール類, リン化合物, 特殊ジオール類), 石油化学 (溶剤: アルコール類, グリコールエーテル類, エステル類, C1-特殊溶剤, オキシ-特殊溶剤, オキシ-C4-アルデヒド; 可塑剤: フタル酸系可塑剤, アジピン酸系可塑剤, ポリエステル系可塑剤, カルボン酸系可塑剤, 可塑剤原料), 無機化学品 (塩酸・無機塩素化合物, 硫酸・無機硫黄化合物, アンモニア・無機窒素化合物, ヒドロキシルアミン類, アルカリ金属類, 三フッ化ホウ素, ホウ素化合物類, ヒドロキシルアセトフェノン類, ガス, 無機開発品), 鉄粉, キャタモールド (粉末射出成型によって金属部品およびセラミック部品を製造するためのフィードストックに対するBASFの商標), 触媒, 電子材料化学品, ライフサイエンス用中間体, 無機スペシャリティケミカルズ, 光学活性化合物, ②プラスチック=分野別製品: 自動車分野, 電気・電子分野, 住宅・建設分野, 包装分野, 玩具, レジャー, スポーツ分野), ③高機能製品=繊維, 顔料, 皮革化学品, 機能性ポリマー, 塗料, 特殊薬品, ④農業, ファインケミカル (食品添加物, 医薬品原料, 化粧品原料, 色素, 香料原料, 飼料添加物), ⑤石油・ガス。

2) BASF社公式Website (http://www.corporate.basf.com/en/ueberuns/?id=YN*xS7vfwbc31-)

3) 国松幸二編者代表『独和大辞典』小学館, 1985年, 259頁。

である。アニリンとソーダは、化学工業製品である。同社は、ドイツを代表する巨大化学企業である。BASF社本社は Mannheim に近いライン川沿いの街ルートヴィッヒスハーフェン (Ludwigshafen) にあるが、BASF グループはグローバル・ベースで160社を超える子会社と合弁会社 (joint ventures) から成り、ヨーロッパ、アジア、北アメリカ、南アメリカの41カ国に生産拠点を置いている。同社は、最近、アジアとくに中国に焦点を定めた国際的事業活動をアクティブに拡大している⁴⁾。

Employees by region in 2004

	2004	% 2004	% 2003
Europe	57,278	69.9	69.5
Thereof Germany	46,666	56.9	56.2
Thereof BASF Aktiengesellschaft	35,303	43.1	42.5
North America	10,578	12.9	14.3
South America	4,769	5.8	5.7
Asia, Pacific Area, Africa	9,330	11.4	10.5
	81,955	100.0	100.0

資料：BASF社Website (http://www.corporate.basf.com/en/ueberuns/mitarbeiter/?id=_h.Vc7uQqbcp28e)から転載。

日本でのBASFの企業活動の歴史も古い。後述の通り、ドイツのBASF社は1925年にドイツ化学企業の企業合同によって成立したIGファルベン株式会社の誕生時に合同の中核をなした企業の1つであったので、合同前の同社の事業はIGファルベン社に引き継がれ、その対日戦略において日本と深い関わりを築いていった。それについては、すでに工藤章が優れた研究成果『イー・ゲー・ファルベンの対日戦略：戦間期日独企業関係史』東京大学出版会、1992年を刊行している。われわれは、同書から、かつて世界の化学工業に君臨したドイツの巨大化学企業IGファルベン社の

4) BASF社公式Website (http://www.corporate.basf.com/en/?id=V00-_EvV47ugTbcp0wm), BASF from “Wikipedia, the free encyclopedia” (<http://en.wikipedia.org/wiki/BASF>), BASF Aktiengesellschaft 『コーポレート・レポート2003』同社発行 (BASFジャパン株式会社日本語版作成), 2003年3月, 及び, BASFジャパン株式会社 『BASF in Japan』同社発行, 2004年参照。

両大戦間の活動、日本の化学工業への同社の影響、日本での同社の企業活動による技術・経営移転などを知ることができる。

戦後の日本においては、戦後ドイツでのBASF社の再建に伴っていち早く同社の日本事業の再建が着手され、「BASFジャパン株式会社」が1949年に設立された。今日、日本のBASFグループはBASFジャパン株式会社（BJL）を中心とする7社で構成され、従業員は1,200名に達する⁵⁾。BASFジャパンはドイツのBASF株式会社（AG）の100%出資会社であり、東京本社に加え、三重県四日市に同者の工場とテクニカルセンターを、茨城県鹿島に工場を保有する。主な事業内容は、化学品、高機能製品（顔料、ディスパージョン、特殊薬品）、プラスチック・繊維、ファインケミカル等である。その他の6社とは、①「BASFコーティングスジャパン株式会社」（BCJ、横浜市、BASFコーティングスAG100%出資、自動車用OEM塗料及び補修用塗料、工業用塗料）、②「BASFイノアック・ポリウレタン株式会社」（BIP、愛知県新城市、工場：愛知県新城市、岐阜県南濃、1965年設立、持株比率：BASFジャパン50%、[株]イノアックコーポレーション50%、取扱品目：ポリウレタン・システム、PURエラストマー及びPUR完成品、MDI）、③「BASFアグロ株式会社」（BAG、東京都、工場：福島県郡山市、持株比率：BASFジャパン100%、取扱品目：農薬）、④「日曹BASFアグロ株式会社」（NBL、東京都、工場：富山県高岡市、1995年設立、持株比率：BASF AG 45%、日本曹達[株]45%、三井物産[株]10%、取扱品目：シクロヘキサノン系除草剤）、⑤「BASF出光株式会社」（BIC、東京、1985年設立、持株比率：BASF AG 67%、出光石油化学[株]33%、取扱品目：1,4-ブタンジオール）、⑥「BASF武田ビタミン株式会社」（BTV、東京、テクニカルセンター：三重県四日市市、2001年設立、持株比率：BASF ジャパン66%、武田薬品工業34%、取扱品目：バルクビタミン、プレミックス、医薬品添加剤⁶⁾）である。

2. 研究内容の概要

同書は、以下のような章別構成から成っている。

端書き

目次

編者序文—新産業から新経済へ（Werner Abelshausen）

5) BASFジャパン株式会社Website (<http://www.basf-japan.co.jp/>) 参照。

6) 同上参照。

I. グローバル企業への成長—1865年から1900年までのBASF (Wolfgang von Hippel)

1. 前史

フリードリッヒ・エンゲルホルン—パイオニア的企業家精神

大規模市場—新染料の美しい世界

ドイツにおける最初のコールタール染料工場の一つ

2. 草創期 (1865-1873年)

マンハイムか、それともルートヴィヒスハーフェンか？ 会社のドラマティックな設立

模倣から自主研究へ—ハインリッヒ・カーロ

自然染料の初合成：アリザリン

拡張過程：シュツットガルトのクノッスプ社及びジークレ社との1873年企業合同 (fusion)

3. 科学と市場の間—「染料時代」のBASF (1873-1900年)

大要

開発センター：トップ・マネジメントと組織問題

会社の心臓部：研究及び生産

生産ファクターとしての科学：実験研究

市場への難路—実験施設としての染色場

「染料の時代」Ⅰ：アニリン染料

「染料の時代」Ⅱ：アゾ染料

「染料の時代」Ⅲ：アリザリン染料

「染料の時代」Ⅳ：インジゴ染料

産業への供給者としての有望な将来：無機物生産

生産のエコロジカル・コスト—環境問題？

生産ファクターとしての知的所有権：パテント問題

市場への統合

経済的成功の出現：販売取引高、市場及び利益とその利用

生産における人的ファクター：会社人事—高級給与所得者（「管理職員」）とワーカー

経済と政治

II. 合成化学のパワー (1900~1925年) (Jeffrey Allan Johnson)

1. 過渡期の会社

1900年パリ万国博覧会でのBASF

1900年頃の企業リーダーシップの変化

合成染料の勝利

新製品：進路の取捨選択

2. 3つの問題からフォン・ブルンクの死まで (1904-1911年)

3つの問題：企業集中、コンフリクト及び組織上の変化

染料におけるイノベーションとマーケティング

イノベーションと産学コラボレーション：染料化学から硝酸塩まで

労働者 (workers and employees) 運動

フォン・ブルンク時代の終わり

3. オッパウからロイナへ：合成アンモニアと戦争 (1912-1918年)

アンモニア合成, 1912-1914年

戦争直前のBASF, 1912-1914年

開戦：戦時経済への突入

ロイナ・プロジェクト

戦時再編成：IG拡大

労働争議停止から集団抗議へ：戦時の労働力

4. クライシスから企業合同へ (1919-1925)

挫折と大変革：戦後チャレンジに取り組む新リーダーシップ

平和時の赤裸々な現実：占領、テクノロジー譲渡、賠償

戦後マーケティングとイノベーション

オッパウでの労働争議と壊滅的爆発事故

クライシスから企業合同へ (1922-1925年)

III. IG Farben 企業合同からBASF株式会社設立へ (1925~1952年間) (Raymond G. Stokes)

1. 序 IG時代のBASF：概観と仮説

2. 新コンツェルンへの適合性, 1925-1929年

組織変更とIG

初期IG時代のアップライングループ：組織及び他のIGプラントとの関係

生産におけるトレンド

研究と開発

労働と労働力

3. クライシスへの対処 (1929-1933)

クライシス後のトラストとグループの再編

生産トレンド

ダウンサイジング

ドイツ化学工業の政治問題化とアッパーライングループ

4. 和解とコンフリクト (1933-1936年)

ナチスの権力奪取, トラスト及びグループ

生産復旧とR&Dトレンド

製造工場内での社会労働政策

5. 戦争のためのアウトルキーと準備 (1936-1939年)

戦争のための4カ年計画組織と準備

生産, 販売及び研究トレンド

労働, 労働力及びナチ・イデオロギーと実践

6. ドイツ支配下のヨーロッパにおけるアッパーライングループ (1939-1942年)

ナチス新体制とアッパーライングループ

軍需生産と投資

労働

7. 総力戦の中でのBASFグループ (1942-1945年)

総力戦とアッパーライングループ諸工場

生産トレンド

労働

アッパーライングループとIGアウシュヴィッツ

破滅と戦後計画

8. 占領から再建へ (1945-1952年)

BASF諸工場への戦争の影響

フランス占領下の生産と投資

労働力と労働組合主義の再出現

IGフェルベン・トラストの解体とBASFの再建

IV. 1952年再建以降のBASF (Werner Abelshauser)

1. 過去は未来へ続く: BASF新出発

再建

非法人組織

再生

2. コーポレート・カルチャー：リソースとしての伝統？

ルールとコンテキスト：生産の社会システム

戦略と組織：コーポレート・リーダーシップ

一貫性と適応性：ファイナンス

コントロールとトラスト：株主関係

パートナーシップとコンフリクト：労使関係

コストとベネフィット：社会的性向をもつプラント政策

研究，テクノロジー，応用：高品質生産のカスタマイズ化

3. 旧マーケットと新ベース：石油化学への初期躍進

新旧マーケット

Rhenish Olefin Works社の設立

躍進

4. 伝統と隔たり：IGファルベンの第2次解体

隔たり

協力

再統合

第2次解体

5. トップへの道：戦略的意思決定

方向性問題

利益は計画可能である：覇業への意欲

生産活動の大規模連結：新テクノロジー・パラダイム

6. 「ルートヴィヒスハーフェン」型工場の多数出現：生産システムの統合化と

生産拠点問題

ルートヴィヒスハーフェン生産拠点

第2のルートヴィヒスハーフェンへの探求

ルートヴィヒスハーフェンは随所に：モデル輸出

チャレンジⅠ：原子力プラント

チャレンジⅡ：環境保護

7. アメリカからの学習？ 合弁事業から連合体 (Verbund) へ

- パワーの維持：Dow社との合併事業
- 協力と団結：繊維事業への進出
- 文化バトル：Dow Badische社を支配する主導権争い
- モデル輸出：連合体 (Verbund) による統合

8. クライシスと統合

- BASF：Badische社廃業と操業停止工場
- 悲惨な結末：Phrix社の挫折
- 大変革と持続：企業再編

9. 疲弊なき原料工場：進取的統合と企業買収

- 新事業への進出
- テープ・レコーダー I：アメリカ市場
- テープ・レコーダー II：守勢での「ナショナル・チャンピオン」
- ラッカー：守勢的な進取的統合
- 医薬：先駆け (Early Bird)
- ルーツへ立ち返る

10. 大変革と持続

- 多国籍企業へ向って
- 新産業への道：オイル産業ないし「ニュー・エコノミー」？

付録 1865年創設以来のBASFの取引量と利益

資料

アーカイブ索引

会社名索引

人名索引

製品・製造プロセス索引

事項索引

以上のような章別構成からも明らかになるとおり、同書が取り扱っている企業史研究の中心は、ナチス体制下でその軍需生産に深く関わったIGファルベン社の成立・展開・解体史 (1925-1949年) としてではなく、IGファルベン社時代を含めてBASF社の企業全史を描いている。したがって、BASF社の企業全史においてIGファルベン時代とくにナチスに関わった時代を含めて歴史的に連続した歴史として描いているところに本書の特長がある。

BASF社の沿革を概観すると、衆知の通り、同社がナチス期の戦争犯罪に深く関わって企業史を刻むという数奇な運命を辿って、今日に至っていることが明らかとなる。その宿命は、同社が1925年末にドイツの他の主要化学工業企業と合同して、新しく「IGファルベン社」(IG Farbenindustrie AG)を構成する主力企業となったときから始まったのかも知れないと見る向きもある。そうであろうか。そもそも、BASF社は、1865年にフリードリッヒ・エンゲルホルン (Friedrich Engelhorn) によって、ドイツのマンハイムにおいて、「バーディシェ・アニリン・ウント・ソーダ・ファブリク社」(Badische Anilin- & Soda-Fabrik, BASF社)として創立された。1925年にBASF社、バイエル社 (Bayer AG, 1863年設立) や、フランクフルト・アム・マイン近郊の地ヘキストに立地するヘキスト社 (Hoechst AG, Farbwerke vorm. Meister Lucius & Brüning AG, 1880年設立) など、当時のドイツの大手化学工業会社8社が企業合同して、IGファルベン社 (IG Farbenindustrie AG) が成立した。ドイツ化学産業を独占する巨大企業となった。その経緯は、ここに紹介する同書だけでなく、工藤章の研究⁷⁾でも詳述されている。それは、アメリカの巨大化学企業デュポン社に対抗しようとしたものである。IGファルベンの発足に危機感を持ったイギリス化学産業界は、翌1926年にインペリアルケミカル (ICI) を設立した。ここに、世界の化学産業界は、上記3大企業によって、三分されることとなった。

IG Farben はナチス体制下になると、同政権の経済政策に深く関与し、ナチスの戦争遂行や蛮行に関わっていった。IGファルベン社はアウシュヴィッツ (Auschwitz) などの強制収容所での大量殺戮に使われた有毒ガス「ツィクロンB」(Zyklon B)⁸⁾を製造・供給したことで巷間ではよく知られているが、ナチス期の独占的的化学企業として莫大な利益を上げた。ツィクロンBそれ自体は、1920年代にフリッツ・ハーバー (Fritz Haber) なる化学者によって偶然に開発されたものであったといわれ、第二次世界大戦中に使用されたドイツの殺虫剤の商標であり、当初は発疹チフスを媒介するシラミを駆除するための殺虫剤として使用されていたが、やがてナチスによって強制収容所のガス室で殺戮毒ガスとして利用された。ツィクロンBは、IGファルベン社がDegussa社と共同所有したデゲシュ社 (Degesch, Deutsche Gesellschaft für Schädlingsbekämpfung mbH) によって製造された。

7) 工藤章『現代ドイツ化学企業史：IGファルベンの成立・展開・解体』ミネルヴァ書房、1999年、83頁以降参照のこと。

8) Werner Abelschäuser, Wolfgang von Hippel, Jeffrey Allan Johnson and Raymond G. Stokes: *German Industry and Global Enterprise. BASF: The History of a Company*. Cambridge University Press, 2004, pp.328-330.

第二次世界大戦の終了とともに、IG Farbenは連合国による資産接収のもとに置かれた。ソ連占領地区(後の東ドイツ)に残った工場は人民所有企業(VEB, Volkseigene Betrieb)に改組されるか、あるいは戦争賠償(war reparation)として接収された。西側占領地区に残った工場は1952年に解体されて、バイエル、ヘキスト、BASFなど新会社に改組され、戦後再出発の道を行っていった⁹⁾。

3. 先行研究実績との関連で

IGファルベン社やBASF社の企業史に関する先行研究実績は少なくない。例えば、以下のような研究実績¹⁰⁾を見出すことができる。Otto Kohler: *--und heute die ganze Welt : die Geschichte der IG Farben BAYER, BASF und HOECHST*. Papy Rossa, 1990; Badische Anilin- und Soda-Fabrik AG, Ludwigshafen am Rhein, Abteilung Öffentlichkeitsarbeit (Hrsg.): *100 Jahre BASF*. BASF, 1965; *100 [i. e. Hundert] Jahre BASF : aus der Forschung*. Badische Anilin - und Soda-Fabrik, 1965; Uta Stolle: *Arbeiterpolitik im Betrieb: Frauen und Männer, Reformisten und Radikale, Fach- und Massenarbeiter bei Bayer, BASF, Bosch und in Solingen (1900-1933)*. Campus-Verlag, 1980; *BASF : a report on the company's environmental policies and practices : the Council on Economic Priorities, Corporate Environmental Data Clearinghouse, November 1991*. Council on Economic Priorities, 1991; Gerd Hatje (ed.): *BASF Rechenzentrum*. Verlag Gerd Hatje, 1965; Artur Goldschmidt, Hans-Joachim Streitberger: *BASF Handbook on Basics of Coating Technology*. Vincentz, 2003; *BASF-Studie. Schattauer Betriebliche Krankenversicherung: 100 Jahre Betriebskrankenkasse der BASF Aktiengesellschaft* / [Herausgeber, BASF Aktiengesellschaft, Ludwigshafen, Zentralabteilung Öffentlichkeitsarbeit ; Redaktion, Bernd Gerling, Ekkehard Rudolph]. Verlag Wissenschaft und Politik, 1984; *Chemie in der Landwirtschaft : BASF-Symposium vom 12. September 1979 in Limburgerhof*. Verlag Wissenschaft und Politik, 1980; *Das BASF Hochhaus : herausgegeben zur Einweihung am 21. März 1957*. Archiv für Wirtschaftskunde, 1957; Werner Abelshauser (Hrsg.): *BASF : eine Unternehmensgeschichte*. C.K. Beck, 2002; Jürgen Rauschel: *Die BASF : zur Anatomie eines multinationalen Konzerns*. Pahl-Rugenstein, 1975; *Die Badische Anilin- & Soda-Fabrik*. -- Badische Anilin- & Soda-Fabrik, 1908; *Die landwirtschaftliche Versuchsstation Limburgerhof, 1914-1964 : 50 Jahre landwirtschaftliche Forschung in der BASF* / [herausgeber, Badische Anilin-&

9) 工藤章, 前掲『現代ドイツ化学企業史 : IGファルベンの成立・展開・解体』1999年参照のこと。

10) NACSIS Webcat: <http://webcat.nii.ac.jp/> から検索。

Soda-Fabrik AG]. -- BASF, 1965; Edith M.H. Strasser: *Ex Oriente lux : Lackkunst aus Ostasien und Europa : eine Ausstellung des Lackmuseums der BASF Lacke+Farben AG, Köln, 1987/1988*. 4. Aufl., BASF Lacke+Farben AG, 1987; Timothy J. Minchin: *Forging a common bond : labor and environmental activism during the BASF lockout*, foreword by John David Smith. University Press of Florida, 2003; Carsten Reinhardt: *Forschung in der chemischen Industrie : die Entwicklung synthetischer Farbstoffe bei BASF und Hoechst, 1863 bis 1914*. Technische Universität Bergakademie Freiberg, 1997; Werner Abelshauer: *German industry and global enterprise : BASF, the history of a company*. Cambridge University Press, 2004; *Im Reiche der Chemie / [Text, Wilhelm Roggersdorf in Zusammenarbeit mit der Badischen Anilin- & Soda-Fabrik AG, herausgegeben zum hundertjährigen Firmenjubiläum der Badischen Anilin- & Soda-Fabrik AG]*. Econ-Verlag, 1965; Robert Wagner: *Konfigurationsentscheidungen von Global Players im Spannungsfeld von Internationalisierung und Umweltschutz : Analyse und Gestaltungsempfehlungen, dargestellt anhand ausgewählter Beispiele der drei größten Global Players der deutschen Chemieindustrie, Bayer, Hoechst und BASF*. P. Lang, 2000; Manfred Eggersdorfer, Siegfried Warwel und Gunter Wulff (hrsg.): *Nachwachsende rohstoffe : Perspektiven für die Chemie ; Basierend auf einem Symposium, das im April 1992 unter der Schirmherrschaft des BMFT bei der BASF in Ludwigshafen stattfand*. VCH, 1993; *Unser Boden : 70 Jahre Agrarforschung der BASF Aktiengesellschaft*. Verlag Wissenschaft und Politik, 1985; Dieter Schiffmann: *Von der Revolution zum Neunstundentag : Arbeit und Konflikt bei BASF 1918-1924*. Campus, 1983; Rudolf Queisner, Kurt Schliesser *Zirkel-Schraubstock-Elektronik : 50 Jahre BASF-Lehrwerkstätten*. BASF Aktiengesellschaft, 1977.

日本においても、ドイツ化学工業史・企業史に関する優れた力作が生み出されている。前川恭一著『ドイツ独占企業の発展過程』ミネルヴァ書房、1970年は、戦後いち早く巨大ドイツ化学企業 IG Farben の戦後解体過程を取り上げた。その後、ドイツ化学工業史に関する本格的な企業史研究が優れた成果を見た。加来祥男『ドイツ化学工業史序説』ミネルヴァ書房、1986年、工藤章『イー・ゲー・ファルベンの対日戦略：戦間期日独企業関係史』東京大学出版会、1992年、同者『現代ドイツ化学企業史：IGファルベンの成立・展開・解体』ミネルヴァ書房、1999年などによって、IG Farben の誕生から解体までの詳細な企業史を知ることができる。その他に、以下のような論文が発表されている。伊藤裕人「IG Farben の国際経営戦略」『経営研究』(大阪市立大学)第29巻第3号、93-114頁、1978年9月。永岑三千輝「ドイツ第

三帝国とイ・ゲ・ファルベン—企業史に関する最近の研究の批判的検討』『経済学季報』(立正大学), 第37巻第4号, 75-120頁, 1988年3月。永岑三千輝「第三帝国のポーランド占領政策とイ・ゲ・ファルベン」『経済学季報』(立正大学)第36巻第1号, 95-132頁, 1986年6月。永岑三千輝「イ・ゲ・ファルベン社とナチ体制—私的独占体と国家の諸関係」『経済学季報』第34巻第3・4号, 27-102頁, 1985年3月。惜しむらくは, アーベルスハウザー等の同書では, 工藤章等, 日本人の先行研究が検討されていない。仮に日本での優れた先行研究を検討した上で同書がまとめられていたならば, もっと興味深い論及があったのではないのか, と思うのは, 筆者だけであろうか。

最後に, 本書の編者であるアーベルスハウザー教授は, 現代ドイツの代表的な経済史研究者の一人であり, 日本でも良く知られた存在である。アーベルスハウザーの研究が一躍脚光を浴びることになった論争がある。戦後マーシャル・プランと通貨改革が西ドイツに「経済奇跡」をもたらしたとする通説に対して, アーベルスハウザーは戦争終結直後の工業設備と労働力の豊富な存在に関する実証的研究にもとづいて, マーシャル・プランの援助や通貨改革の実施以前に西ドイツでは自力での経済復興が始まっていたとし, 「経済奇跡」の「神話」を批判した¹¹⁾。この「神話」批判は, 「アーベルスハウザー論争」と呼ばれ, 激しい論争を呼び起こすことになった。これについては, 工藤章『20世紀ドイツ資本主義—国際定位と大企業体制』(東京大学出版会, 1999年, 446-449頁及び463頁脚注7で詳しく述べられている。アーベルスハウザーの最近の出版書でドイツ経済史学会の話題を集めている書は, *Kulturkampf - Der deutsche Weg in die neue Wirtschaft und die amerikanische Herausforderung*, von Werner Abelshäuser, 232 Seiten, Kulturverlag Kadmos, 2003 (*The Dynamics of German Industry: Germany's Path Towards the New Economy And the American*

11) この批判は, Werner Abelshäuser: *Wirtschaft in Westdeutschland 1945-1948. Rekonstruktion und Wachstumsbedingungen in der amerikanischen und britischen Zone*, Stuttgart 1975で提起された。その後の著作, Abelshäuser: *Wirtschaftsgeschichte der Bundesrepublik 1945-1980*, Suhrkamp, 1983 (酒井昌美訳『現代ドイツ経済論』朝日出版社, 1994年)でも確認されている。なお, 工藤章「ヴェルナー・アーベルスハウザー著, 酒井昌美訳, 『現代ドイツ経済論: 1945-80年代にいたる経済史的構造分析』, 朝日出版社, 1994年1月, iv+258頁, 2,500円」『社会経済史学』(社会経済史学会), 第60巻第5号, 719-722頁, 1995年1月参照。アーベルスハウザーの研究業績は少なくない。彼の論鋒については, 酒井昌美「1945年より80年代にいたる西ドイツ経済—W・アーベルスハウザーの所説」『帝京経済学研究』(帝京大学)第30巻第1号, 157-182頁, 1996年12月。

Challenge, by Werner Abelshauser, 168 pages, Berghahn Books, 2005)である。雨宮昭彦氏(千葉大学)等が2006年秋に日本語翻訳版『文化闘争——ニュー・エコノミーへのドイツの道とアメリカの挑戦』を東京大学出版会から刊行する予定とのことである。雨宮氏によれば、同書は、「ドイツにおけるヨーロッパ研究拠点のひとつ、エッセンの文化科学研究センターの市民講義から生まれた」もので、「現代経済のドイツモデルをアメリカ型に対置し、その帝政期に始まる歴史的形成過程とコーポラティズムモデルとその現状、そしてフィンランドモデルを念頭においた固有の改革の方向の提示など、実に魅力的な内容となっている。¹²⁾」アーベルスハウザーのドイツ経済史研究の集大成といわれる業績として、もう一冊、『戦後ドイツ経済史』(*Deutsche Wirtschaftsgeschichte seit 1945*, von Werner Abelshauser, 527 Seiten, Beck, 2004)を上げておきたい。

(Cambridge University Press, 2004, £ 55.00)

12) 千葉大学大学院社会文化科学研究科公共研究センターのWeb-Site: 国際公共比較部門サブリーダー、雨宮 昭彦(法経学部教授) http://www.shd.chiba-u.ac.jp/~coe21/comparison/amemiya_txt.htmから引用。